

平成30年6月25日現在

機関番号：34305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07324

研究課題名(和文)文化・語彙史料としての桃源瑞仙『史記抄』 書名・人名及びことわざ・慣用句

研究課題名(英文) Togen Zuisen's "Shiki-sho" as a material of Japanese cultural and vocabulary history

研究代表者

山中 延之 (YAMANAKA, Nobuyuki)

京都女子大学・文学部・講師

研究者番号：00782591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)： 古代語から近代語への過渡期に当たり、現代語に直接つながる変化が集中的に起こったとされるのが室町時代である。その室町時代の言語資料のうち、中心資料に当たる桃源瑞仙『史記抄』を言語史料としてさらに活用するため、本研究では『史記抄』のテーマ索引(人名・書名及びことわざ・慣用句索引)の作成を行った。それに付随して、『史記抄』のことわざに関する論文を執筆し、抄物の概説等を主題とする発表を行った。

研究成果の概要(英文)： I made the index of personal name, book title, proverbs and idioms of Togen Zuisen (桃源瑞仙)'s "Shiki-sho (史記抄)". "Shiki-sho" is one of the most important linguistic materials in Muromachi period. In accompanying it, I wrote a paper on the proverb of "Shiki-sho" and made a presentation with an outline of commentaries in Muromachi period (抄物、Shomono materials).

研究分野：日本語史

キーワード：史記抄 桃源瑞仙 抄物 日本語史 ことわざ 人名 書名

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本語史研究では、言語変化の各段階の解明において大きな成果が挙げられてきた。しかし、一つ一つの変化の過程については必ずしも十分な成果が挙げられたとは言えない。たとえば、古代語から近代語への変化の中で、特にその変化が集中的に起こったとされる室町時代にどのような諸現象が見られ、どのように変化していったのかという問題については、今後大いに考究の余地がある。

その問題を解くために従来活用され、今後また活用すべき資料が桃源瑞仙『史記抄』である。『史記』の注釈書であり、文明九年(1477)に完成したものである。漢字カナ交じり文が多く、室町時代の日本語資料として最重要資料の一つと評価されてきたものである。しかし、『史記抄』の本文を解析するための手段はこれまで乏しかった。従来、多く利用されてきたのは『抄物資料集成』所収『史記抄』の索引であると思われるが、これは総索引ではなく要語索引である。また、言語を総合的に分析するためには単語のみならず熟語の検索も必要とされるが、同索引では熟語を引くことが難しい。そのため、この索引を利用しただけでは『史記抄』の語彙を網羅的に調査することができないという状況にある。さらに、17世紀初頭刊行の古活字版を影印した『集成』の公刊後、その古活字版の底本となった室町時代後期の写本(京都大学附属図書館清家文庫蔵)の翻刻が出版されたため、現存最善本であるこの清家文庫本を基とした索引の出現が望まれる。このように、『史記抄』は室町時代語研究の重要資料でありながら、情報抽出の手段に恵まれなかったということができる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、桃源瑞仙『史記抄』のテーマ別索引の作成を行うこととした。人名・書名・ことわざ・慣用句の4種の索引である。理想としては総索引、ないし形態素解析を付した検索しやすいテキストデータを作成することが望ましいが、短期間のうちには実現が難しい。今回はそこに至るための基礎作業として特定語句に限った索引を作成した。平成28年度は人名・書名、同29年度はことわざ・慣用句索引を作成した。先述のように、『史記抄』は要語索引が存するのみであるため、その豊富な語彙の全体を知るには通読する以外に方法がない。そのため、『史記抄』の言葉のごく一部を抽出した索引でも大いに役に立つと考えられるのである。

特に人名・書名索引を作成する目的は、室町時代の文化状況、特に学問の実態を理解するためである。また、用例を採集する作業に

よって、内容の読解も進展し、本研究以降の研究にも寄与することが考えられた。

ことわざ・慣用句の索引を作成する目的は、未だ研究の不十分な中世のことわざ・慣用句を網羅的に紹介し、抄物が言語史・文化史の資料として有用であることを示すことにある。

3. 研究の方法

『史記抄』の人名・書名・ことわざ・慣用句索引を完成させるために、水沢利忠・亀井孝による翻刻『史記桃源抄の研究』を対象に調査を実施した。翻刻の底本となっている京都大学附属図書館清家文庫蔵本(清原宣賢・業賢書写)を適宜 Web 上で閲覧した。Web サイトを閲覧する際、本研究の研究費で新たに購入したコンピュータ・プリンタ・スキャナを活用した。

基本的には、『史記桃源抄の研究』を通読し、人名・書名・ことわざ・慣用句を摘記して Excel に記入していく方式を採った。

固有名詞を採録する際には、京都大学清家文庫蔵『史記抄』の公開画像を参照し、固有名詞の種類を表す符号(朱引き)を参考にした。ただし、同蔵書には日本の固有名詞にだけ朱引きが無い箇所も散見され、中には朱引きそのものの無い部分が意外に多く見られた。朱引きの無い部分については、一字一句文脈を確かめつつ読解しなければならず、この作業に時間を要した。このため研究に一時遅延が生じたが、ここで本文を丁寧に読んだことにより、最終年度の作業をより早くかつ正確に行えるようになったと思われる。また、本研究課題終了後の研究を進める時にも大きな力となるとと思われる。

上記の採録作業と並行して、他の抄物資料の影印を購入し、『史記抄』読解の参考資料を手近に備えた。索引作成のための基礎作業として内容を理解することが不可欠であり、読解のためには他の抄物資料との比較が欠かせないためである。研究代表者が既に所有している『時代別国語大辞典室町時代編』や正・続・新『抄物資料集成』等を除き、主要な資料を研究費にて購入した。具体的な書目は、『禅籍抄物叢刊』(汲古書院)・『松ヶ丘文庫所造禅籍抄物集』『毛詩抄』(左記2点岩波書店)・『抄物大系』(毛詩抄・蒙求抄・人天眼目抄・江湖風月集抄)(勉誠社)等である。これらを随時参照することで、読解を速めることができた。

4. 研究成果

【索引作成について】

平成28・29年度の2年間を通じて、桃源瑞仙『史記抄』の人名・書名・ことわざ・慣用句索引を作成することができた。また、その過程で得た知見を学術論文・学会発表とし

て公表することができた。

研究開始時にはすべての人名・書名を採録する予定であったが、最終的には採録対象を絞り込んだ。『史記抄』は史書であるため、当然のことながら人名がきわめて多く登場する。同じ人名が繰り返し現れることも珍しくないが、それらをすべて採集したとしても、作業時間こそ膨大に増えるものの作成後の検索の利便性が大幅に増すとはいえにくかったためである。そこで、採録の方針を次のように改めた。

- ・日本の人名・書名は必ず採集する。
- ・中国の人名・書名は、当該の巻（あるいは本紀・列伝）の原文には登場しない人物を可能な限り採集する。

例えば、秦始皇本紀に始皇帝は幾度も登場するが、すべてを索引に採ることの意義は小さいと判断し、採らなかった。ただし、秦始皇本紀以外の箇所が登場する始皇帝はできるだけ採った。『史記』に登場しない人物名はすべて採録するようにした。また、例えば、唐・宋時代の詩人、中でも杜甫・李白・蘇東坡・黄山谷などの名は数多く現れる。それらを採録することで、今後、室町時代の禅林でどのような漢詩人がどのように受容されたかを考える手掛かりを得ることができたと考えられる。

今ひとつ人名を挙げるならば、日本人名に「妙智」、すなわち漢書研究で当時から著名であった竺雲等連の名が頻出する。『史記』と『漢書』とは内容が一部重複するから、「妙智」の漢書講義が『史記抄』に取り込まれていることは自然なことである。『漢書抄』は数種類が京都大学附属図書館清家文庫に所蔵されているが（重要文化財、続抄物資料集成所収）、竺雲等連の『漢書抄』はまとまったものとしては残されていない。今後に残された課題として、『史記抄』から竺雲の『漢書抄』を復元することを挙げるができるだろう。

ことわざの索引作成に当たっては、「～ト云」等の表現とともに用いられるなど、人口に膾炙していることが文脈上明らかなものを優先して採録した。また、慣用句の索引作成に当たっては比喩表現を優先して採録した。また、作成した索引を活用して「桃源瑞仙『史記抄』のことわざ「袴下辱」について」を執筆した（内容については後述）。

現在、研究代表者は抄物研究会（『黄氏口義』研究会）に引きつづき参加しており、索引を参加者に活用してもらうことを予定している。その活用を経て索引の内容に改訂を施し、その後冊子等の形式で公開する予定である。必要に応じて、索引を利用するにあたって必要な知識を『史記抄』概説等の形で併載

することを考えている。

【論文・学会発表について】

上記の索引作成の基礎、また発展的作業として以下の3件の研究発表を行った（数字は、「5．主な発表論文等」欄と同じである）。

雑誌論文1

『史記抄』には、「袴下辱」（こかのほじ）ということわざが見られる。このことわざは、近世になると「韓信のまたくり」と表現を変えてひろく文芸作品等で親しまれた。総じて、人名を含むことわざは江戸時代から多く見られるようになることから、『史記抄』の「袴下辱」は、漢故事が一般に浸透する前の状況を表しているのではないかと推測した。

学会発表1

以上の索引を作成することと平行して、抄物の概括的な知識を得ることに努めた。その途上において、学会発表3に引き続き、抄物の概説を講義する機会を与えられた。それが、訓点語学会講習会として行われた「抄物入門」のうちの「抄物の基礎知識」である。これは、3の改訂版であり、抄物全般を取り扱う上での注意点（成書過程・年表・研究史、等）をまとめたものである。その中には桃源瑞仙や『史記抄』に関する事柄も含まれるため、本課題による研究を大いに活かすことができた。

学会発表2

『史記抄』読解の途上で関心を抱いた、室町時代の過去・完了の助動詞について研究発表をおこなった。古代語にあったキ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ等の過去・完了の助動詞は、現代までに夕に収斂してしまったが、その収斂の時期はいつなのか、従来の研究では十分には明らかになっていない。その鍵を解く手掛かりが抄物にあると考えられる。抄物は、夕を基調としながらも、タシ・タケルのような複合形で古代語の助動詞を残しているのである。本発表はタシに論点を絞り、15世紀後半の『史記抄』では100例を超えるタシがあるが、16世紀の『中華若木詩抄』などになると、その数は極めて僅少となることを報告した。これは、タシ・タケルの衰退とみられる。本発表は、抄物の相互比較による語誌の一例として、改稿のうえ雑誌に投稿する予定である。

学会発表3

研究代表者の参加する『黄氏口義』研究会において「抄物概説」をおこなった。研究会参加者への概説であるが、本課題による研究

を進行するためには抄物の全体像を把握しておく必要があり、その把握にも資するところがあった。概説の中で原典や読解法など基本的なことがらを説明したが、特に意を用いたのが抄物年表である。抄物には略年表はあっても網羅的な年表が作られたことはない。そのため、今回の試みは有用なものであったと思う。ただし、遺漏も多く、今後一層の増補が必要である。

【今後の展望】

既に各節末に展望を記したところもあるが、それらとは重複しない今後の見通しを以下に述べたい。

研究代表者は、既に平成 30～33 年度科研費課題（若手研究）の採択を得た。課題名は「桃源瑞仙『百衲襖』のテキストデータ化による日本語史研究」である（課題番号 18K12403）。『百衲襖』は『史記抄』とともに桃源瑞仙の著作であり、一方の読解が他方の理解に大きく影響する。また、両者は質量ともに抄物資料群を代表する長編と言ってよい。両者の検索がしやすくなれば、室町時代語研究をはじめとする抄物研究の諸分野に貢献するものとなるだろう。今回の研究活動スタート支援による研究が次の研究課題につなげられるよう、2 つの抄物の研究を連動させて今後も研究を進めていきたいと考えている。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

1, 山中延之、桃源瑞仙『史記抄』のことわざ「袴下辱」について、アジア遊学、査読無、2018、印刷中

〔学会発表〕（計 3 件）

1, 山中延之、抄物の基礎知識、訓点語学会抄物講習会、2017（8月23日）

2, 山中延之、抄物概説、『黄氏口義』研究会、2017（1月7日）、京都大学

3, 山中延之、桃源瑞仙『史記抄』に見られる過去・完了の助動詞 タシを中心に、京都府立大学国中文学会、2016（12月10日）

〔図書〕（計 0 件）

6．研究組織

(1)研究代表者

山中 延之（YAMANAKA, Nobuyuki）

京都女子大学・文学部国文学科・講師